会員のひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

愛犬シータとの毎日 犬を巡る三題話

札幌市医師会
マロニエ通　クリニック
越智（おち）さと子（こ）

１．我が家の愛犬シータは11才、ヒトの60才過ぎに相当し、白いものが混じり始めた。娘たちが幼い頃、大型スーパーに買い物に行くたび、入口脇ペットショップに入りびたり、犬を飼いたいとせがまれた。見識ある店主で、子どもが小さい間はおもちゃのように扱い犬のために良くない、飼うのは小学校高学年以降、と助言を受けた。次女12才頃、この機を逃すと一緒の時間が取れないと決断し、生後３か月の赤柴　雌を手に入れた。命名権をじゃんけんで勝ち取った次女、覚えたてのギリシャ文字から名前をθとつけた。飼うのを最後まで反対した連れ合いが最も耽溺、昔飼っていた犬の悲しいエピソードのためだった。長女が高校生の頃、通学帰りの駅から自宅まで、毎夜一緒に3.5kmランニングに伴走してくれた。子どもが家を離れた今は、高齢夫婦の散歩をマネージする存在だ。犬友を介す出会いあり、犬は自然に笑顔を呼ぶ。目をあわせると、セロトニン分泌が促されるとか。家族の一員以上の鍵（かすがい）で、家族LINEグループに朝夕散歩記録をアップ、離れていても癒やされる**（写真）**。これから、どれくらい一緒に過ごせるか？　ふと思いつつ、日々大事に過ごしたい。

２．大学でてんかん外科治療に携わっていた頃、犬と二人？暮らしの20代女性に出会った。薬剤抵抗性てんかんで、未明の強直間代発作時、彼女の犬はいつも直前に気が付き顔を舐めて起こしてくれる、という。入院し長時間脳波モニタリング中、それを実証できないか？　犬の同室を病棟師長に掛け合うも、当然却下。乳幼児でさえ同室にできないのに！と。静岡てんかん・神経医療センターでも無理。しかし、てんかん学の泰斗であるトロント小児病院の大坪　宏先生によると、カナダでは当然同室が許されるとのことだ。ウーム。彼女の発作は焦点切除後消失したので、確認の機会は喪われた。においに敏感な犬は飼い主の呼吸や匂いの変化を早々に感知するらしい。麻布大学獣医学部獣医学科小動物外科学研究室の齋藤弥代子先生によると、発作察知犬は訓練で育成できる訳ではなく、特異な才能だそうだ。

３．ペットの病気は言葉がない分、飼い主は大変気を揉む。てんかん発作を患う犬の飼い主の心痛、いかばかりと思う。イヌ用抗てんかん発作薬はヒト程多くはない。齋藤先生はイヌへの迷走神経刺激療法（VNS）を数多く扱い、良好な結果を報告されている。実は私共、てんかんの緩和的外科治療VNSの電池交換術で取り出した機材（残量８％以下）を、患者さん方の承諾を得た上で麻布大学に提供していた。今年正月、NHKで人工哺育白熊ピースの25年間成育の感動的ドキュメント番組が放映された。３才でてんかん発症、白熊は水泳中の発作で溺水しかねず、齋藤先生グループが予防用モニタリング装置を開発、レスキューできるようになったという。久しぶりにご連絡したところ、今はサル用装置を開発中とのこと。‘発作でサルは木から落ちる、白熊は溺れる、人は交通事故に遭う　種によりリスクが違うの’と笑っておられた。VNSは猫やネズミ、兎等の実験動物で実用化に至った機材だ。種を超え、双方に幸いが届くのは嬉しい。

最後に、犬に絡んだ本を紹介する。

＊犬がとなりにいるだけで　北川なつ　実業之日本社（セラピードッグの奇跡）

＊犬の伊勢参り　仁科邦男著　平凡社新書（日本人と犬の驚きの歴史）

＊アラシ　奥地に生きた犬と人間の物語　今野保著　ヤマケイ文庫（北海道の過酷な自然の中犬と人の絆を刻むノンフィクション４編）

＊ガルヴェイアスの犬　ジョゼ・ルイス・ペイショット著、木下眞穂訳　新潮社
（巨大な物体と犬たち　ポルトガルの小さな村のお話）